

2018/1/9

(ブログ)

答えが出る日

JANUARY  
24

ボスがお店に来なくなりました。

ちょっと長くなりますが、お時間を戴いてお話させていただきます。

実はこんなことがあったのです。

しばしお付き合いいただければ、ありがたいことと思います。

その日もいつものようにボスが「ナマステー」と言って胸の前で手を合わせる仕草をして、お店に入ってくるなり、まずは隣のテーブルで、一人もぐもぐカレーセットを食べている若い女の人に

「自分はこれから煙草を吸いますが、いいですか？」

と訊き

「私も吸いますから、どうぞ」

と言われると、一旦座ったそのすぐ後に、席が暖まる間もなく、やおら立ち上がって、今度はカウンターでひとりビールとチキンサンドリーを食べている例のカナダ人のカーペンターさんのところへ、つかつかと歩み寄り

「へい、大工の旦那、部屋はこんなにあったかいのに、なんで襟巻、ぐるぐる巻きにしてはるの？子供みたい。それとも風邪でも曳いてはるの、かいな？」

すると、その旦那さんが

「風邪はひいてないよ。千葉の寒いところで、外仕事して帰ってきたんで、体が冷えていきっているんだ」

「そっか。ところで、わしはあんたの名前、まだ知らへんにやけど、なんちゅう名前や？おせえて」

「リッキーだよ。あんたは？」

「カズや。」

旦那さんは、リッキーさんか。

リッキー、ラッキー、ロッキー、リッキー、ラッキー、ロッキー、もひとつおまけに  
わおわおダンスのリッキーさんか。

リッキーというのは、なんやラッキー・カムカムの知り合いか？カナディアン・ロッキーの親  
戚かなんかか？なんぞ、連中と関係でもあんのん、かいな？」

「なんだ、そりゃ？リチャードの愛称だよ。なんか、あんた、アタマ大丈夫？そのジョーク、  
全然面白くないよ。そんなへたくそなジョーク言うのは、もうあんたが飲む前からもう酔っ  
ているからか？」

「ま、幾分トサカに毒、回っている、と言われているきらいはありますわな。でも生きてい  
くうえで問題ありへんさかい。オッケ、オッケ、ノー・プロブレムやわ。下手なジョークも  
生きている証拠！！一回「滑った」から言うて、どうってことあれへん。練習や、練習。影  
響なしや。あ、は、ははは」

といった後、リッキーさんはそっちの物言いの方が面白かったらしく、一転して、二人でこ  
ぶしをぶつけ合って、腕を交互に絡ませ、その上についている手をがっちり、握り合ってい  
ました。

二人はそれで分かり合ったのかもしれませんが、聞いているこっちは、なんのことやら、ほ  
ぼ完べきに意味不明。まごうことなく、職業不詳で国籍不明のヤクザさん、みったい。

すると、ようわからん、ふーっ、と自分がため息をついている間に、今度はリッキーさんが  
「カズ、そっちに行ってもいいかい？」

「ああ、ええよ。一緒に飲もうやないか」

と返事をしたのですが、リッキーさんはボスの席にはいかず、隣でひとり、もぐもぐやって  
いる若い娘さんの席にちゃっかり腰を下ろして、すぐさま

「わたしは、リッキーです。お嬢さんのお名前は？」

と、即セールス開始。

「リョウコです」

と、幾分たじろぐような、戸惑うようなしぐさをするのもお構いなく、

「おー、ヨウコさん。あの有名な」

何のことかわからないそのリョウコさんという娘さんは

「は？」

と、ポツカン、目が「点」になったのですが、

すると今度は横の席にいたボスが、その話をトンビみたいにかっさらって

「ちゃうねん。リョウコさんや。あのジョンレノンの嫁はん、オノ・ヨーコとはなんも関係  
あれへん。ねやろ？リョウコ、はん」

「ごめん、ごめん、リョウコさん。お仕事は何をしているんですか？」

やっと、話の流れが飲み込めたらしいリョウコさんは、少し落ち着いて

「看護師です。丘の上の大きな病院の」

するとまたまた、ボスが横やりを入れて、

「一年前、わて、そこに入院したりしましたわ」

リョウコさんは意外な事実を知って、急に親近感が湧きでもしたのか、

「じゃあ、ひょっとしてお会いしていた、かも。で、カズさんのお仕事は？」

こうなるとボスは、完全にマイクを独占した芸人のように、

「物書きもどきで、経営コンサルタントみたいなもんで、悪徳金貸しで、レストラン手伝いらしいようなことをしとったり、で、どれもこれも、あつてないようなもんばかりですねん」と一気にしゃべり、それを受けたリョウコさんが、興味津々な目をし出したのを見て、このままでは話を完全にボスにもっていかれる、と思っただけのリッキーさんが、横から

「ね、これからカラオケ行きましょう」

と、完全に一発大逆転狙いの、敏腕営業マンに大変身。即、間髪抜きで、セールストーク満載の営業活動全面展開。

それを聞いて、今度はボスが、

「これですわ、これ」

と言いながら、自分の口の前で、手でアヒル口のパクパクをやってみせて

「気を付けておくれやし。このおっさん、スケベかもしれんへんさかいな」

と笑いながらいうと

「ノー、ノー。私はスケベではないよ。若くてかわいらしいお嬢さんと楽しい時を過ごしたいだけだよ。私が大切にしているのは、一に愛、二に信用、そして、三に楽しい仲間だからね。その三番目をしたいただけなんだよ。一、二、をつぶしてまで変なことはしないよ。リョウコさん」

そして、今度はボスにひそひそ声で

「僕はね、年増が好きなんだ。そういうことするなら。若い子はちょっと、だよ。だから、心配いらないんだよ。わかる？カズ」

と、言っていたとか。

そのあと

「それにしても、リッキー、日本では部屋の中にいるときは、マフラーやキャップは取らなあかんや」

「うん。マフラーは取るよ。でも、帽子は・・・」

「わしかて、一緒や」

と言ってボスは、自分の頭をポンポンたたいたのですが、リッキーさんは

「それは坊主頭。僕のこれは、禿げ頭。それは違うんだよ。第一、リョウコさんだって、部屋の中でニット帽かぶっているじゃないか」

「ん、

そっか。ほんなら許したるわ。でもな、われ。さっきみたいに、飯食って時に、ヘッドホンしながら、スマホなんか見とったらあかんで。そりゃ、日本のアホ餓鬼のする、こったわ。

やめときや」

結局、話の主導権をいつまでたってもボスから取り返すことが出来ず、ご自慢の営業手腕を完全に封じ込められたらしいリッキーさんは、大きな病院のある丘とは違う、百合丘駅そばの丘の上であって、フィリピーナのガールフレンドが、彼ら二人の子供が待っている自宅に、すごすごと帰っていきました。

見ると、リッキーさんは盛んに頸を横に振りながら、その眼は、さっきと同じ、トンビに油揚げをさらわれた鳩さんみたいな「おめめ」になっていました。

リッキーさんが帰った後、少し間が開いて、話の接ぎ穂が見つからなくなったらしいリョウコさんが、間持たせみたい感じで、幾分よいしょ気味に、ボスに質問しました。

「英語、どこで覚えたんですか？海外に赴任していたんですか？」

とリョウコさんが尋ねると、ボスはそれがヨイショだとは全く気付かず、幾分反り繰り返って、

「ここで、です。相手は、仕事上以外は、日本語がほとんど話せない。僕はネパール語が全く分からない。で、仕方なく、ネパール人が日本語覚えるより、多分楽だろうと、僕の方が英語を覚えざるを得なかった、というお話。仕事が絡むと、否応なしというわけ」

あらら、ここからボスは東京言葉でしゃべっている・・・

「でも、発音がかなり「あちら」っぽい、みたいですけど」

この言葉が、ボスに火をつけたみたいです。ボスは、ここぞとばかりに前のめりになって、

「あらま、ありがとう。

多分、子供のころ、学校から帰ると、家のテレビで、外国の映画ばかり見ていたからかも。昔は、その時間帯の外国映画は、みんな字幕スーパーで、音は全部原語だったんですわ。ララミー牧場とかローハイドとかルート66とかはゴールデンアワーだったからみんな、吹替だったけど、それはお金がかかるんですわ。局側に。で、それ以外の時間帯は、コストの安い字幕スーパーだったっていうわけ。おまけにもっとコストを安くするために、週五日の内、初めの1本が、3日間連続、次の2本目が残り2日連続で、反復ヒアリングが図らずもできていたのかな？今思うとね」

リョウコさんは黙って聞いていました。

で、話好きのボスが、頼まれもしないのに、またまた調子に乗って

「音なんですよ。音。

子供って、言葉覚えるときに、まだ字なんて習っていないから、音で覚えるしかないでしょう？こういうものは、こういう音。こういう情景や状況の時、耳にするのは、こういう音って。それと音をカップリングしているんですわ。

だから、早く覚えたかったら、字よりも音から入った方が断然早いとおもうんですけどね。子供に倣え。子供の真似しろ、ですわ。

字を教えるからなんて言うと、ワンステップ増えちゃうでしょう？余計なんですよね。その

工程。

だから、今どきの親御さん、あほ、ちゃうか？と思ったりもしますのや」

ボスはそこだけ、少しきつい調子で、しかし、そこだけいつもの関西弁でいいました。

すると、今度はリョウコさんが、少し真剣に、興味がわいたらしく

「音楽の音とはちがうんですか？」

「うーん、リズムとかテンポの心地よさを気にするのはいっしょかもしれないけれど。

僕は、あんまり音楽は聴かない人間ですが、人の話を聞くのは好きですわ。その時、リズムとかテンポとか、自分が答えを返したりする場合や、こちらから話しかけるときには、気にしますね。

気にするといえば、逆に気にしなくてもできることもあるんです。音を使って。

まず、とにかく話始めるんです。文の終わりを気にせず、先に。

で、そのあと語呂や響きのいい言葉を選んで伝えていくんです。どんな文章になるかは、その音が連れて行ってくれるのにお任せです。

行った先の A ポイントで、単語三つ知っていたら、そのうち、一番リズムやテンポがいいものを選ぶ。細かい意味の違いや的確さはどうでもいい。B 分岐点にいて二つあったら、そのうちのいい方というようにやっていくんです。それでも、話が長くなって、詰まりそうになったら、in other word, 言い方を変えればと、断って、やり直せば、何とか一文出来上がって、会話や文章になっちゃうんです。自然と。

つまり、一本竿を通すというやり方じゃなくて、演芸場の「さても南京玉簾」のすだれみたいに、だんだんにつないで、しだれ柳みたいに話していくってことですかね。

だって、言葉ってもともと「字」じゃなくて、「音」だったんですからね、でしょう？文法は音が規定して出来上がっているんですから。音が文法を教えてくれるんですよ。音が話の行く先を導いてくれるんですよ。ね、だから、多少の知識があれば、そんなに習わなくても、単語だって文章だって、造語チックに、自分で作れたりもするんですわ」

リョウコさんは結構興味がわいてきたみたいでした。

「じゃあ、単語はどうやって覚えたんですか？」

リョウコさんは、続けて質問しました。

「街です。街。街が辞書。

街に英語あふれているじゃないですか。辞書には絵も動画もくっついていないですよ。上等な翻訳機以外は。でも、町にある英語って、たいてい周囲の絵付き動画付きじゃないですか。しかも、タダ、でっせ。お金、払わんでも、ええんですわ。ごつつう、めちゃめちゃ、お得やないですか。英語学校行ったり、高い翻訳機かったりするの、やっぱり、あほ、でっせ」

とまたまた幾分語気強く、これまたここだけいつもの関西弁。

そのうちリョウコさんは、折角興味をもって上げたのに、その返礼に、予想外の非礼、自分が「あほ」だと言われた気分になったのか、用があるので、これで失礼しますとって、そ

そくさと、先に帰ってしまいました。

ボスは一人になってしまいました。

でも今の自分も、ビムさんがいない間、ホールとキッチンを行ったり来たり、一人二役で、特にキッチンの仕事は自分しかできないので、それにとられる時間が多く、一人になったボスの話し相手も、そうそう今までのようにはできない状況です。

そのせいか、話し相手を失ったボスは、そのあと早々に店を後にしました。

ボスは黙って、ひとり静かにお酒を飲むことができないタイプのお方なのです。

しかし、その後が大変でした。

三人がそれまで話していたテーブル席の衝立の向こう側、座敷席にいたお客さんが

「誰？今のおっさん。がーがー、がーがー、五月蠅いったらありゃしない。しかもエラソーに、あほだの、なんだの・・・気分、ワル！！」

と、ボスにではなく自分に怒りだし、そのお客さんから、ボスについて、あれやこれや、根掘り葉掘り、訊かれたのです。

実は最近ボスが帰った後に、ボスのことを訊くお客さんが増えていたのです。

この前は

「自分は煙草を吸います。お子さん連れなら、煙の届かない奥座敷のほうがいいとおもいますが」

と言われた小学生二人連れのお母さんが、それまでは静かに食事をしていたのですが、ボスの帰った後、突然、自分に向かって

「私は、脚が悪いの。だからテーブル席に座りたかったのに。なんで、座敷席なのよ。おまけに、タバコ吸うんだったら、自分が外で吸えばいいでしょ！！どうしてこの店、禁煙にしないのよ？」

とカンカンに。

脚の件はともかく、この店を禁煙になんかにしたら、お客さんの半分は来なくなってしまいます。それでは困ります。

でも、それ以上に問題なのは、こうしたやり取りに時間を取られ、キッチンの仕事がしばしば妨げられることと、更にもっと、一番問題なのは、こうしたお客さんが増えると、逆に変な悪評がたって、お店にくるお客さんが減ってしまうことなのです。特に今日のいきゃくさんは、隣のスーパーの店員さんで、うわさが広まるのが早いことが考えられるのです。

それでは、いくら大恩あるボスでも、お店の営業を邪魔する悪魔にしかありません。そうであるなら、もうボスには、これ以上お店に来てほしくない気持ちになってしまいます。

第三店舗探しで売り上げアップどころか、本店がこのざまじゃ「元も子もなくなる」からです。

それで、自分は覚悟を決めて、翌朝ボスが店に届け物を持ってきたときに、言いました。

おっかなかったけれど、はっきり言いました。上の二つのエピソードを添えて。

「お店探し、だけ、してください。お客さんの前で大きな声で難しい話をしないでください。お客さんが来なくなります。

私は、単純な人間です。難しいことは分かりません。

だから、店舗探しの理論なんかどうでもいいんです。どこのどれがいくらで、どんな広さで、駅から近いかどうか？それだけ調べて、最終候補だけ持ってきてください。

自分が決めます。

忙しいので、これから隣駅の八百屋さんに買い出しに行きます。

あとは、答えだけ持ってきてください。では」

そうやって店を後にしました。

後で、使用人のクリシュナさんに訊いたら

「しょげかえていた」

そうです。

で、今朝、メールを見ると、そのメールにはボスが

「ビムさんが帰国する今月 24 日まで、お店に行かない。その代わりその日に、候補案をもっていく。これが俺の義務だ。約束する」

と書いてありました。

悪魔のままになるか。それとも救世主になるか？

さて、どちらになるでしょう？

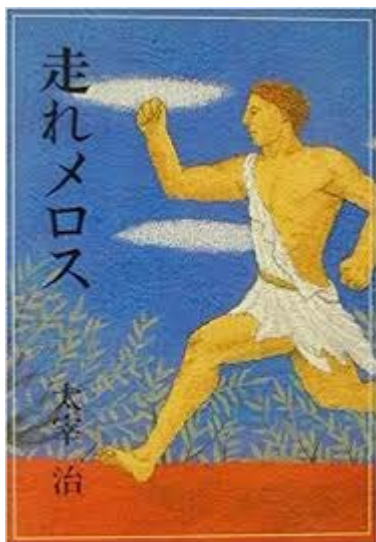
ビムさんの帰国の日に、答えが出ます。

オマケ

2018/1/25

未来予想図 (2018/1/9 付け 予想)

(走らぬメロス)



1月24日

ボスはお店に来ませんでした。

候補案ありません。

昔、ボスが話してくれた日本の物書きの太宰治という人の「走れ、メロス」というお話と、全然違う結末になりました。

そのお話は、友誼、信義はどれほど強いものかを信じられない王様が、その余興と「そんな立派な心掛けのあるやつがいるわけがない」ことを自分に言い聞かせるために、二人の仲のいい青年の内、ひとりが、自分自身人質になり、ひとりが走って往復、且つ時間までに帰ってこなかったら、その人質の青年だけが処刑されるというお話でした。

そのお話では、青年は約束の時間までに帰ってきて、お互い一度だけ相手を疑ったことを告白し合って、自分たちを責め、それをお互いが認めあって、二人して許し合うという結末。

でも、この話をしてくれたボスは、その約束を守りませんでした。

それが、悲しいです。

辛いです。

このまま、日本で永住権をとって、暮らした方がいいのかどうか？

自信がなくなりました。